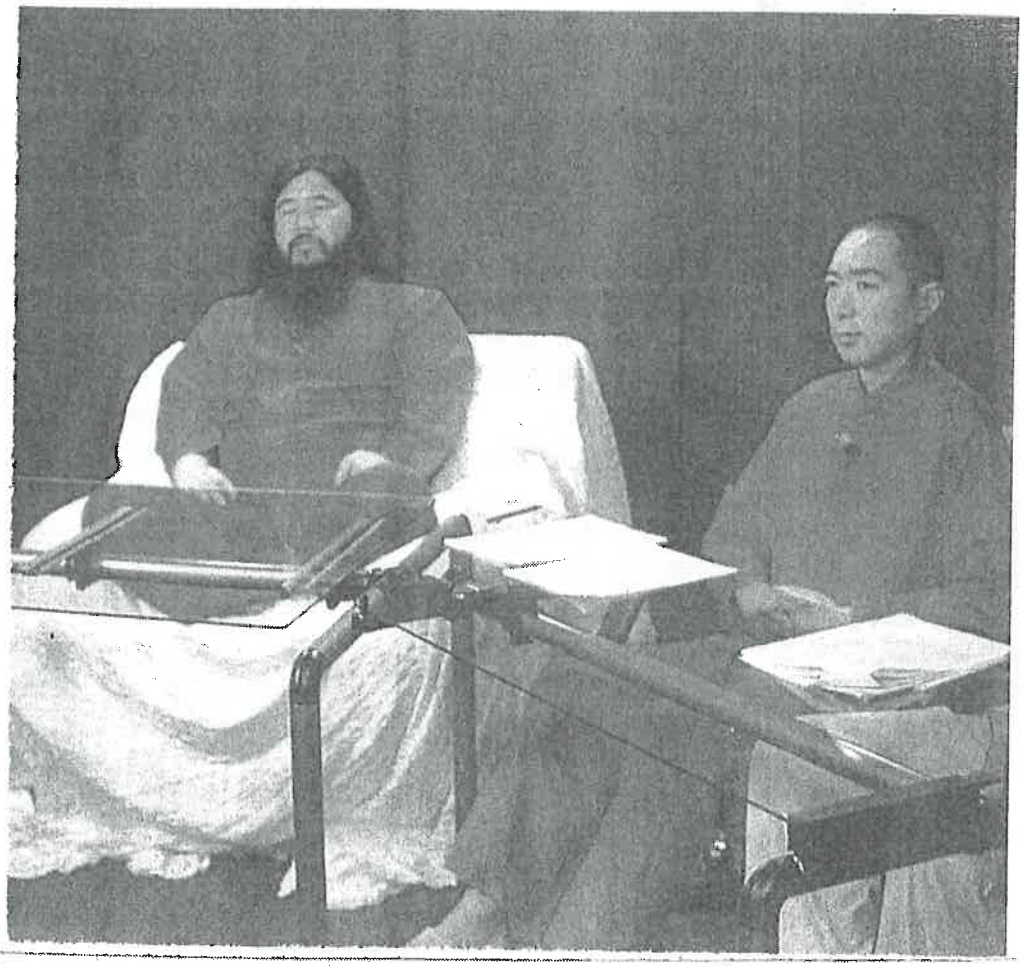
カナリヤの詩（うた）

CANTUS CANARIARUM

第54号
BE 2542.10.29

- 秘儀公開「マンジュシュリー・ミトラの瞑想」
- 特別法について一元サマナから
- 法皇官房信徒庁決意
- 獄中からの手紙Ⅳ



オウム真理教は視聴率80%のロシア国営放送「2×2」で"真理はひとつ"という考えに基づいた科学番組「真理探究」を週一回放映し、好評を得ています。

「本物の時代」
（1993年頃、導師用につくられた小冊子）
より抜粋。

1号

【懐かしき資料】⑧

秘儀公開！！
「マンジュシュリー・ミトラの瞑想」

1994年8月31日伝授

わたしはマンジュシュリー・ミトラである。
わたしはマンジュシュリー・ミトラである。
わたしは正大師となった。
正大師となったならば、すべての魂を救済しなければならない。
わたしは偉大な科学者である。
そしてわたしは偉大な科学技術者である。
わたしの生きる道は達成の道しかない。
つまり、いかにイメージでいろいろな科学の現象が理解できたとしても、
いかに科学技術の本が理解できたとしても、
それはわたしに何の価値も与えてくれない。
わたしに功徳を与えるのはただひとつ、わたしがすべての結果を出すこと。
一つ一つを完全に完成させ、そしてすべてを結果としてあらわし、
それをシヴァ大神、真理勝者方、グルに供養すること。
これ以外にわたしの大乗の修行を進める道はない。
わたしにはブッダ・ローチャナーというコンソート（※）が存在している。
したがってわたしはたえずグヒヤサマジャの瞑想を行い、
小乗のツァンダリーのグヒャサマジャの瞑想を行い、
そしてグルの意思をこの世に具現化する。
それこそがわたしの修行である。それこそがわたしの修行である。
さあ、ものを完成するぞ。
ものを完成するぞ。ものを完成するぞ。ものを完成するぞ。
ものを完成するぞ。ものを完成するぞ。ものを完成するぞ。
一つ一つ確実に完成するぞ。一つ一つ確実に完成するぞ。一つ一つ確実に完成するぞ。
完成はわたしの喜びである。完成はわたしの喜びである。
完成はわたしの至福である。完成はわたしの至福である。完成はわたしの至福である。
なんてすばらしいんだ。
わたしが生まれてきて、マンジュシュリー・ミトラというホーリーネームをもらった。
マンジュシュリーは智慧のボーディーサットヴァである。
そしてわたしも小さいころから智慧を磨いてきた。
マンジュシュリー・ミトラとわたしの顔は非常に似ている。
つまりわたしはほんとうにマンジュシュリー・ミトラの化身なんだ。
したがって、救済を成功させるために、わたしのすべて英知を使うぞ。
わたしのすべて英知を使うぞ。わたしのすべて英知を使うぞ。
わたしのすべて英知を使うぞ。
そして一つ一つ必ず現象化するんだ。一つ一つ必ず現象化するんだ。
ブッダ・ローチャナーをコンソートとし、ツァンダリーの瞑想を行い、必ず完成するぞ。
ブッダ・ローチャナーをコンソートとし、ツァンダリーの瞑想を行い、必ず完成するぞ。

必ず完成するぞ。
わたしは大乗の修行を必ず完成するんだ。
わたしはヴァジラヤーナ大乗の修行を必ず完成するんだ。
ブッダ・ローチャナーをコンソートとし、必ず完成するぞ。必ず完成するぞ。
必ず完成するぞ。
いま多くのことはいらない。わたしは一つ一つを現象化すること。
これがわたしの修行である。
これがわたしの次のステップ、アモガシッディへ至る道の修行である。
この偉大な瞑想を与えてくださったグル、尊師に、帰依し奉ります。
偉大なる大神であられる、シヴァ大神に帰依し奉ります。
そしてすべての真理勝者方と、すべての絶対の真理に帰依し奉ります。

＜終＞

※ コンソート：consort【英】（特に王族の）配偶者。
ここではタントラの瞑想のパートナーとなる女性を指している。
オウムの道場にはグヒヤサマジャの絵が飾られていたと思うが、
あの絵の中でグヒヤサマジャが抱いている女性のことだと思ってください。

【解説】

おそらくこの瞑想のことを知っている人はほとんどいないでしょう。

95 年の冬、当時わたしはまだ富士総本部道場に残っていたのですが、たまたま敷地内のゴミ焼却所の前を通りかかったところ、この村井さん専用の瞑想テープが落ちているのを発見してしまいました。

教団の中にいただけではオウムが犯した事件に関する情報も手に入りにくく、またその信憑性にも疑問があったことなどから、わたしは「もしかしてこのテープの中にオウムの秘密が隠されているのではないか！？ひょっとして“サリンを作るぞ”なんて言っていたらどうしよう、そしたらこのテープを証拠として教団に『尊師はちゃんとサリンをつくるぞといっているぞ』といってやれるかも」などと、期待を胸に膨らませながら、こっそりこのテープを聞いたものです（※もし聞いていることがばれたら破戒とみなされます）。

けれどごらんの通り、このテープにはサリンの「さ」の字も出てきませんでした。「ものを完成させるぞ」なんてぼかした表現が使われたりして、ちょっと期待はずれでした。でも、なんでわざわざぼかした表現を使うのか、その行為自体がかえってオウムを疑わしく思わせもしました。

その他にも「ブッダ・ローチャナーをコンソートとし」などと、結婚相手といわれていた T・G 正悟師との関係を裏付けるような発言があって驚かされたかと思えば、「マンジュシュリー・ミトラとわたしの顔は非常に似ている」などと、聞いていて少し恥ずかしい発言もあります。

しかしこのばかげた発言に対し、「おそらく彼は本当にそう思い込んでいたのだろうな」と思うと、私はふと「巨星逝く」という本の中に収録されていた、麻原さんが村井さんの心の中に流れているのを読み取ったといわれる、あの明るいようでもの悲しい、単調なリズムの曲を思い出し、なんとも言えない気分になってしまうのでした、、、。

（20 代男性　元サマナ）

4号

ＸＸ　特別法について　ＸＸ

１「地下潜伏化の恐れ」

オウムに特別法が適用される。今年（９９年）の臨時国会では、間違いなく法案が可決されることだろう。そして多くの人々がこの法案にたいして賛成することだろう。

しかしわたしは反対である。こんなものをつくってもオウムは地下に潜伏するだけで、逆に彼らの動きがつかみづらくなるだけである。実際にオウムは例の「休眠宣言」を出す前から、特別法対策としてサマナで２人から３人のグループを作り、全国に分散化することを計画していた。

そうなってしまったらどうなるのか。

今まではいきなり山奥の避暑地に、何十人というサマナがどかどかと転がり込み、プレハブ小屋を建てたり、高い壁を築き上げたりしていた。あまりにもオウムらしい行動である。すぐに「あいつらは変だ」、「オウムではないか」とみんな気づくことができた。しかしこんどはそうはいかない。

小人数の人がアパートにやってくる。真夜中に在家の信者が集まることもない。別段と変わった感じもしない。だけどじつはオウムだった。このような事態が全国で発生するのだ。どちらのほうが目に見えない恐怖が増すと思うかは明白である。

だいたい、戦争というものはゲリラ戦ほど厄介なものはない。相手がどこにいるのか、何人なのか、どれだけの武器を有しているのか、などといった情報が欠けていれば、我々は相手に対する戦略すら練ることができないからだ。そういう意味で今回の法案は、オウムを壊滅させるという点においては決定的な効果は望めないだろう。

２「脱会後の問題」

しかもそれだけではない。わたしがもっと危惧しているのは、信者の脱会後の問題である。彼らは教団という具体的な拠り所を失うことになる。すると彼らも教団を脱会しやすくなる。ここまでは、まあいいかもしれない。しかしその後が問題である。

仮に彼らが教団を辞めたとして、彼らはどうやって過去の整理をつけるというのか。実体のない教団について、彼らが考察を深めることはなかなか難しいのではないか。そのいい例が麻原さんである。彼は逮捕されてしまっているので、いま信者は誰も直接話しをすることができない。月に数回開かれる公判において、彼が放つ意味不明な言葉を聞きながら、信者はそれぞれ自分勝手な妄想を繰り広げるしかない。彼の不規則発言を聞いて「わたしは心の整理がつきました」などといえる脱会者がどれだけいるのか。いったい真実は

何だったのかと混乱するだけなのではないか。それと同じ悲劇がもっと大きなレベルで、いままさに起ころうとしているのだ。

実はわたしは先日、現役のサマナのＡさんと話をする機会が会った。そのとき彼もやはり、「このまま教団が分散化してしまえば、信者はしっかりとけじめをつけることができなくなる」と不安がっていた。教団が分散化すれば、自分がオウムの信者であるという意識はいやでも薄れるだろう。支部もない。指導者もいない。かつての仲間もいない。彼らの立場は宙ぶらりんになるはずだ。彼らは信者であって信者でないような状態に陥るといえばよかろうか。そのとき彼らはいったいどこの教団を辞めることになるというのか。辞めても辞めなくても一緒になってしまう。仮に脱会したにしても、誰が彼の脱会届を受け取るというのか。誰が彼が脱会したことを証明してくれるというのか。脱会とは強制されるものではない。最終的には自分の意思で決めなければ意味がないのだ。その思いを受け止める相手がいなければ、彼の思いは無に帰すだろう。彼は辞めても、「わたしはもしかしたら今でもグルの弟子なのかもしれない」といった、曖昧な意識の中に生きることになってしまう。これは脱会後のカウンセリングの際などに大きな問題となってくるだろう。また、たとえ彼が教団を辞めたとしても、周りの人に信じてもらえず、ずっと公安などがついてまわるかしれない。そしてそうなったとしたら、いつ私たちは「オウムは完全に崩壊し、オウム問題は解決しました」と宣言できるのか。これがＡさんの言いたかったことだと思う。教団の存在を認めないということは、逆にこういった複雑な問題を引き起こす可能性が強いのだ。

3「わたしの脱会後の経緯」

私自身のことを振り返ってみると、わたしは教団を辞めても何度か支部に足を運び、かつての法友たちと話したり、正悟師による説法会に参加したりもしてきた。しかしそれは教団に対する信が残っていたからではない。いったい教団が何を考え、信者が何を考えているか。それを知りたかったからだ。それを理解できるまでは、本当の意味でオウムというものを理解したことにはならないし、オウム問題の解決につながらないと思ったからだ。

それだけではない、オウムはご存知のようにカルトである。カルトに属すると、そこでの人間関係は一種の家族以上のものがある。私自身、彼らと離れることは、家族と離れることぐらいつらいものがあった。それゆえ、彼らがいまだに教団の過ちに気づかず、自分という存在を一生懸命殺し続けていることが、はっきりいって見るに絶えなかったのだ。「自分はもう辞めたから、私のオウム問題は解決です」などとはとてもいえなかったのだ。カルト問題の解決とは、構成員全員が辞めない限り解決といえないのだ。

それゆえ、教団の支部に通って、彼らの考えを理解し、時には教義について論争したりする機会がどうしても必要だったのだ。しかしはじめは教義について色々と言い争ったりしたが、やがてわたしは無意味だと気づいた。「仏教ではこういっているではないか、オウムはそれと違うではないか」などといったところで、彼らは「既存の仏教も間違っている、

4号

堕落している」などといってらちがあかないのだ。そのような経験を通じてわたしは、「教義などではない、彼らが本当に求めているもの、苦しんでいるものを受け止め、理解してあげる必要があるのだ」と気づき始めた。

それからわたしは、ただ彼らの話を聞くだけにとどまることが多くなった。「いまあのサマナはどうしているの？」とか、「こんな事件があったみたいだけど大変だねえ」とった、他愛もない話しかしなくなった。争いをするのではなく、相手に教団の形式的な見解を答えさせるのではなく、彼らの本音、彼らの心の奥底からくる言葉を聞きたかったからだ。

おそらく彼らの中で、わたしの気持ちを理解していた人などいなかっただろう。しかしそれでもわたしはそんなこととはお構いなしに、自分の信じる道を歩むことにした。そして話をする中で、わたしは彼らの苦しみを、少しずつ感じ取ることができた。本当は彼らは、ただ真実の「道」を求めているだけなのだ。だがオウム以上の教えなど存在しないという偏見に縛られ、身動きが取れなくなってしまっているだけなのだ。

あるサマナの人にオウムの教義の不完全性について問い掛けてみたところ、彼は「いま私は、尊師の考えをすべて理解できなくてもいいと思ってる。そんな無駄なことを考えるくらいならマントラを少しでも唱えた方がいい」といいはった。だが彼の目には、とても心の余裕など感じられなかった。またあるサマナの人に、「教団を辞める気はないの？」と聞いてみたところ、「このまま辞めても中途半端だから、、、」との答えが返ってきた。わたしはそれをきくと、急いで持っていた仏教書を彼のポケットの中にねじ込んだ。彼らに必要なのは、彼らを受け入れてくれる真実の道なのだ。

4「感じ取ること」

そんなことをしているうちに、このオウム問題を解決するには、私たちは彼らが真に希求するものを感じ取り、そこへ至る手助けをしてあげるだけでいいのだと思うようになった。教団を破壊しようと考えても、先に述べたように何の解決にもならないだろう。ただ「つぶせばいい」と考えるのは、まったく浅はかな考えだと思う。その点で政府はまったく計画性がないといえる。オウム問題の解決とは何なのか。彼らはそのことをまったく考えていない。それは教団を壊すことではない。問題は彼らの歪んだ心、救われない心を解決してあげることなのだ。

彼らは何を求めて、オウムに入信し出家したのか。彼らはこの社会は欲望と争いに満ち溢れ、真実の幸福などないといった。あるいはすべては無常であり、苦である、それゆえに人は解脱せねばならないといった。彼らが望んだものはあまりにも純粋すぎた。しかしその願望をかなえてくれる存在は麻原さんしかいなかったのだ。

いまサリン事件からもう4年がたち、そして5年目がたとうとしているが、彼らが社会に突きつけた問いに対して、我々はどれだけ答えてあげることができただろうか。わたしはそれを考えると悲しくなってしまう。彼らのなすことにただ反対する住民たちや、ネガ

ティブなイメージを植え付けるだけのマスコミ、あるいは公安といった人たちが、いったいどれだけ教団の解体に貢献してきたのか、その費用対効果はほとんどマイナスに近い。馬鹿の一つ覚えみたいに同じことを繰り返すばかりで、まったく進歩がないではないか。

余計な手間ひまをかけるよりも、本場のチベット密教のお坊さんでも呼んで、彼らのところにお話に行ってもらうほうがよほど効果的ではないのか。彼らは俗人の言うことなどには耳を貸さないし、日本の坊さんにも目もくれないが、そういった方たちなら敬意を表すのではないか。

このような話は、すでに事件発生当初から口にされてきたことだ。しかし本当にやるべきことは、だれも手をつけようとしないものらしい。そしてあいかわらず同じことを繰り返し、解決とは逆の方へと突き進んでいるのだ。

今回の特別法は、ある意味でオウム問題を最悪化させる要素を秘めている。教団がばらばらになれば、私たちは彼らとコミュニケーションをとることも難しくなるし、彼らを説得する機会も減るだろう。

今回の特別法のきっかけとなった、全国各地の転入騒動は、ほとんどが教団に対する無理解からくる、根拠のない不安によるものにすぎない。教団の肩を持つつもりはまったくないのだが、彼らが違法な行為をしていない限り、われわれは彼らを拒否する権利などないと思う。

住民たちはむしろ彼らを積極的に受け入れ、コミュニケーションをとり、相互理解を深め、彼らと一緒に新しい社会を作る努力をしてあげる方がよかったのではないか。彼らを受け入れることの方が、逆に教団を破壊することにつながったのではないだろうか。そしてそういった行為を通じて、彼らが真実を見つめる機会をつかむことができたなら、自然と彼らは謝罪の方向へと進んでいったのではないか。一刻も早くというあせりの気持ちが、私たちの目を狂わせている。我々もまたハルマゲドンという実体のない怪物におびえたオウム信者と同じだったのだ。

教団の施設があった三和町では、信者の意見も聞こうということで、信者からアンケートをとろうとしていた方がいたが、ああいう人がもっと増えてくれればよかったのにと残念でならない。ただそういう人が一人でもいたことだけは、この社会はまだまだ捨てたものではないな、とも思えた。

わたしはいま、かつての法友たちと可能な限り接触し、住所と電話番号を渡したりしている。教団がばらばらになり、何か困ったことがあったら連絡してください、ということにしたのだ。ついでだからこの紙面にもメールアドレスを載せておきます。正悟師の方も見知らぬ方も、どうぞご連絡下さい。よろしかったカナリヤの会で会いましょう。

Email：vipassana@geocities.co.jp
元サマナ「ライオン丸」

54号

法皇官房信徒庁決意

懐かしき資料⑨

私は信徒庁の一員である。
信徒庁の使命は、
できるだけ多くの凡夫を入信させ、
できるだけ多くの活動信徒を作り、
できるだけ多くの功徳を積ませ、
できるだけ多くの出家修行者を生み出すことである。
タントラヴァジラヤーナは、グルの意思の実践がすべてだ。それ以外は無効である。功徳にならない。
タントラヴァジラヤーナは、グルの意思の実践がすべてだ。それ以外は無効である。功徳にならない。
グルの指示がすべてだ。それ以外は無効である。功徳にならない。
グルの指示がすべてだ。それ以外は無効である。功徳にならない。
タントラヴァジラヤーナは、結果の道である。
タントラヴァジラヤーナは、結果の道である。
したがって、結果のためには手段を選ぶ必要がない。
したがって、結果のためには手段を選ぶ必要がない。
なぜならば、凡夫を悪趣から解放し、自分自身も最終の解脱悟りに到達すればいいからである。手段は、その手続きにすぎない。
よって、いっさいの観念を捨てるぞ。いっさいの観念を捨てるぞ。
よって、いっさいの観念を捨てるぞ。いっさいの観念を捨てるぞ。
そして、タントラヴァジラヤーナの実践を行うぞ。
これからの救済活動のポイントは、単に入信させることではない。信徒を活動させ、出家させることである。
なぜならば、信徒を悪趣から解放し、解脱悟りを得させることが結果の道だからである。
まず、入信した信徒には、オウム真理教の基礎的な修行をさせよう。
マントラ修行、瞑想、教学をさせるぞ。
マントラ修行、瞑想、教学をさせるぞ。
マントラ修行、瞑想、教学をさせるぞ。
それにより真理の流れに導き入れるんだ。
それにより真理の流れに導き入れるんだ。
それにより真理の流れに導き入れるんだ。
次に「バルドーの悟りのイニシェーション」を受けさせよう。
これにより、信徒が真理を実践する上での信徒の心の障害はすべて取り除かれる。
これにより、信徒が真理を実践する上での信徒の心の障害はすべて取り除かれる。
キリストのイニシエーションをまだ受けていない信徒は、このイニシエーションを受けるようになる。
次は、キリストのイニシエーションを受けさせよう。
これによって彼らは自己のカルマを証智するはずだ。
まず、キリストのイニシエーションを受けさせたいと思わせるために、
そして効果的にキリストのイニシエーションを受けさせるために、準備セミナーを受けさせよう。
そして、キリストのイニシエーションで、信徒に強烈な体験をさせよう。
地獄、餓鬼、動物は存在しているんだ。
そして、悪業をなせば悪趣に転生するということをしっかりと認識させるんだ。
あるいは、高い世界は存在している。
そしてグルに帰依すればその世界に行くことができるということを認識させるんだ。
そのためにはキリストのイニシエーションを受けさせる必要がある。
そのためにはキリストのイニシエーションを受けさせる必要がある。
そして、キリストのイニシエーションに参加した信徒たちに関しては、フォローアップセミナーでしっかり帰依を固めさせるぞ。真理の実践を固めさせるぞ。
そして次のステップに導くぞ。
次のステップは導きである。
さあ、導くぞ。
まず、第一に自分自身が無明の凡夫外道を導くぞ。
自分の友人、知人、縁故関係をすべて導くぞ。
オウム真理教に直接アプローチしてきた凡夫外道に法則を説くぞ。
たとえ、導きの途上でカルマ落としに出会っても平然と耐えるぞ、
あるいは叩かれても叩かれてもそれを喜びとするぞ。
第二に、信徒と一緒に導くぞ。
次の機会には、しっかりとその信徒一人でも導けるよう導きの手本を見せるぞ。
たとえ、導きの途中でカルマ落としに出会っても平然と耐えるぞ。
あるいは叩かれても叩かれてもそれを喜びとするぞ。
そして最終段階だ。
信徒に導きの実力がついた。
独力で導けるようになった。
この段階で、信徒にしっかりと導かせるぞ。しっかりと導かせるぞ。

導きの途上で会うカルマ落としに平然と耐える、
あるいは叩かれても叩かれてもそれを喜びとすることができる強い信徒を作るぞ。
カルマの法則は絶対である。
多くの凡夫外道を導いた信徒は、カルマの法則によって必ずより高いステージの人に導かれる。
つまり、信徒が救済されるためには、信徒に導かせる必要がある。
さあ、しっかりと信徒に導かせるぞ。信徒に導かせるぞ。
導きのできない信徒には、布施の実践をさせるしかない。
導きのできない信徒には、しっかりと布施の実践を徹底させるぞ。
しっかりと布施の実践を徹底させるぞ。
これ以外の方法によって、その魂が救われることはない。
これ以外の方法によって、その魂が救われることはない。
これによってしか、その魂は救済されないんだ。
したがって、徹底的に布施の実践をさせるぞ。
徹底的に布施の実践をさせるぞ。
そして法則を実践させるからには、その法則を徹底して実践されなければならない。
よって私は、ラトナサンヴァバの法則を実践させるぞ。
もともと財そのものは三グナの変形した形である。
したがって、これは誰の所有でもない。
この誰の所有でもないものを真理のために使うとするならば、それは最高の功徳となる。
逆にこの誰の所有でもない財が、煩悩を増大させるために使われているとするならば、それは断じて救済の障碍である。
断じて救済の障碍である。
なぜならば、その財はその魂の煩悩を増大させるからである。
なぜならば、その財が布施されることによって進むはずの救済計画が、その分だけ進まないからである。
なぜならば、その魂がその財を布施することによって積むはずの功徳を、積むことができないからである。
したがって、はぎ取るぞ。はぎ取るぞ。
身ぐるみはぎ取って、偉大なる功徳を積ませるぞ。
丸裸にして、その魂の大いなる飛躍を手助けするんだ。
身ぐるみはぎ取ることに対して躊躇するということは、その魂の本当の幸せを願っていないということだ。その魂を輪廻転生を考えた場合、現在の幸・不幸は全く関係ない。
つまり、その魂が泣こうがわめこうが、最高の転生をさせるためには、すべてを奪い尽くすしかないんだ。
それでもはぎ取ることを躊躇するのは、四無量心が足りない証拠だ。
聖哀れみが足りない証拠だ。
したがって、はぎ取って、はぎ取って、すべてを奪い尽くすぞ。
はぎ取って、はぎ取って、すべてを奪い尽くすぞ。
そして、業質のある魂には、より激しいラトナサンヴァバの実践をさせるんだ。
より激しいラトナサンヴァバの実践をさせるんだ。
財そのものは誰の所有でもない。
財が誰かに帰属するなどというのは、明らかに幻影なんだ。
幻影である証拠として、死後、わたしたちは財を持っていくことはできない。
生前の財を所有することはできないんだ。
したがって、財は積極的に奪い取るべきである。
財は積極的に盗み取るべきである。
よって、心の強い魂には、より激しいラトナサンヴァバの実践をさせるぞ。
より激しいラトナサンヴァバの実践をさせるぞ。
導き、布施をなし功徳に満ちた信徒の次のステップは出家だ。
現在は、カーリー・ユガの時代である。
目から入ってくる情報も耳から入ってくる情報も嫌悪、性欲、食欲をかき立てる。そしてエネルギーそのものがアパーナ気を強めている。
したがって、放っておけば、現代人は三悪趣に落ちる。
よって、できるだけ早く出家に導くぞ。
できるだけ早く出家に導くぞ。
できるだけ早く出家に導くぞ。
結局、在家にいては救済されない。
確実に救済するためには出家するしかない。
よって、出家させるぞ。
出家させるぞ。　出家させるぞ。　出家させるぞ。

これは、１９９４年後半、尊師の側近とされる部署で、繰り返し覚えさせられた「決意」です。地下鉄サリン事件などの背景として掲載しました。

54号

嘘つき団体「オウム真理教」

「オウム信徒は嘘つきだ」と。最近つくづく、そう思います。その例としては、元信徒の方に渡されると思いますが、オウムのパンフレットがあれば、嘘をついてでも来なさい、と半強制で呼びかけていました。最近も、「タントラ・ヴァジラヤーナは封印した」などと大嘘をついているし、「ダミー会社をつくって社会を騙し、金もうけをしています。

あと、「あのときは」上祐氏。すぐバレるような嘘をペラペラペラペラと。「うるさい！ダマレ！！」と言いたいと思います。それから、オウムの親が、麻原さんにあまりに嘘が多すぎる。一つだけ書いておきましょう。NHK（一九八九年十二月六日号）の中沢新一氏との対談です。

（坂本弁護士一家失踪事件について）

（麻原）それについては、私たちのほうこそ、独にうまされたような気分なのです。先日の記者会見で説明しましたように、あの事件については、オウム真理教はまったく関係がないとしか、言いようがないのですよ。それにこのもの失踪された坂本弁護士は、たしかに「被害者の会」というのの顧問弁護士ではあるんだのですが、彼だけが特別な能力をもった弁護士というわけでは決してなく、ほかにも弁護士はたくさんおりますからね。たとえその人がいなくなったとしても「被害者の会」がなくなることもありませんし。だとすると、オウム真理教が（その事件を）やる意味は、まったく根拠がないのです。

（中沢）でも、教祖は、先生（＝中沢）を前に、はっきり否定なさるわけですね。

（麻原）はい。もちろん否定します。

（中沢）それなら、弁護士（＝中沢）としても気が楽になりますけど、がっちり共犯連中が、麻原さんの気がかなりとっちゃってたということもないでしょうね（笑い）。

（麻原）もちろんです。

（中沢）監獄不行き届きだ、だいたい（笑い）。

（麻原）とにかく、因縁だけで四〇の知らない人がいるので、信徒さんを合わせると、全部で五〇〇名から六〇〇〇名の方がいらっしゃいますから、それはわからないですよね。しかし、オウム真理教に入ってらっしゃる方は、みんなすごく真面目ですし、教祖も聖人ですから、私にあり得ないと思います。

（中沢）わかりました。もうこの問題には立ち入りません。広瀬さん、この対談からもわかるとおり、平気で嘘を

獄中からの手紙Ⅳ―嘘つき団体「オウム真理教」

つく人です。中沢新一氏というインテリを騙すことも、楽しんでいるようではありませんか。詐欺師としての本領発揮というところでしょう。この対談は『尊師ファイナルスピーチ』に再録されています。ファイナルスピーチは法則を残すために編集された本らしいので、尊師の大嘘も永久に保存されるでしょう。やはりオウム教団は「嘘をついてもよい」と考えているとしか、思えない。

オウム信徒が平気で嘘をつく、論理的背景を説明しましょう。オウム信徒は

① 真理のためならば嘘をついてもよい、という教えが、体にしみこんでいる。

② オウムは真理である、と盲信している。

よって、①＋②＝「オウムのためならば嘘をついてもよい」という論理が、オウム信徒の頭の中にあるのです。オウム信徒は「オウムのためなら、……」という免罪符をもったつもりで、嘘をつきまくっているわけです。とんでもない連中ですね。オウム信徒には注意しましょう。

さて、オウム信徒が嘘をついてよいと考えている、その論理的背景①、②は両方とも誤りです。その説明をします。

① 「ほんとうのことを言うことにより、人命が失われるなどの特別な場合は、ほんとうのことを言ってはならない」このような例外規定は存在します。しかしこれはあくまでも、特別な場合（人命が失われるなど）にだけ適当できるのであって、「オウムのイベントに出る」とか「活動資金をかせぐ」とかいう、くだらない場合には、使ってはいけません。つまりオウムは、明らかに適用範囲を逸脱して使っているのです。

そして特別な場合であろうと、なかろうと、嘘をついたならば、必ずそれは嘘のカルマとなります。それを覚悟の上で行わなければならないのです。オウム信徒はこの自覚がありません。だから「不動産仲介業者に騙された」などの、アホな主張をするのです。オウム信徒は毎日、死ぬまで嘘をつきつづけるのですから、毎日、死ぬまで騙されても仕方ないと覚悟すべきです。

② オウムは真理ではない。だからオウム信徒は、非真理のために嘘をつく、という大悪業を犯しているのです。

よって、①＋②＝「真理のためという大義名分をふりかざし、適当範囲を大幅にオバーしつつ、全く良心の呵責なしに嘘をついている」これは何でしょうか？ 単なるエゴ＝煩悩です。もう嘘をつくのはやめなさい!!

以上で、オウム信徒が嘘つきであることの証明、及びオウム信徒は嘘をいうな、という忠告を終りたいと思います。

オウム信徒が真理（もちろんオウムのことではない）に目覚めますように

以上

4-5

FUJITSUBO

知っていること 知らないこと

本号の表紙を見ると、まさに「オウム真理教」の会報か？と感じられてしまうかも知れない。中身も「マンジュシュリー・ミトラ正大師の瞑想」であり「法皇官房信徒庁の決意」とくるのだから、まさに誤解されてしまいそうである。

しかし、実は、どちらも、ほとんど信者さんの知らない「懐かしき資料」である。破壊的カルトにおいては、メンバーは、全体像を知らない。情報の遮断は、決して外の情報を知らないだけでなく、中の情報も知らない。

指導者のいうことに従えばよい、それ以外は知ってはならないという集団だから、当然の結果である。だからこそ、「おしゃれな名刺いれ」のつもりで銃把を作り、訳が分からずサリンの噴霧器を作った。１９９５年当時、一連の事件につき真に他の多くの信者が知らなかったことを、なかなか理解してもらえなかった。

でも、いつまでも「知らない」では済まされない。「真理」をもとる者ならば、尚更だ。オウム集団があってこそ、実行犯は無差別大量殺人まで起し、麻原さんは指示することが出来た。一般の信徒が歌っていた歌も「進軍」であり、「たたかーえ　わたしーの　真理の実践が　今はーじまるー」である。麻原さんへの帰依からして、実行犯になったかどうかは紙一重だった。

事件の発覚から、４年半を過ぎ、裁判は進行して、地下鉄サリンの実行犯に死刑判決まで出された。麻原さんはブツブツ言うばかりで、オウム集団の指導者は傍聴には意味がないとの指示を出したと聞く（あのね、最終解脱者麻原彰晃尊師の声を聞かないでどうすんの）。

いま、「ものを完成するぞ」の瞑想を聞き、「はぎとるぞー」の決意を聞き、そのうえで、麻原さんの村井さんの写真を見て、どう感じるだろうか。

ではまた。

http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/

歌を忘れたカナリヤは
後の山に捨てましょか
いえいえそれはなりません

歌を忘れたカナリヤは
背戸の小藪に埋めましょか
いえいえそれもなりません

歌を忘れたカナリヤは
柳の鞭でぶちましょか
いえいえそれもなりません

歌を忘れたカナリヤは
象牙の船に銀の櫂
月夜の海に浮かべれば
忘れた歌を思い出す

◎カナリヤは歌を思い出す手助けをする。

◎カナリヤは自分で自分の歌（考え）を歌う。

◎カナリヤは歌を歌えなくなった鳥を棄てるのではなく、温かく見守る。

（地球の揺りかごで）

発　行　カ　ナ　リ　ヤ　の　会
連絡先　〒２４２　神奈川県大和市中央２～１～１５　パークロード大和ビル２階
電　話　０４６２～６３～０１３０　　大和法律事務所　窓口滝本太郎気付
ＦＡＸ　０４６２－６３－０３７５
購読費・カンパ　横浜銀行大和支店　普通１３４３０７８　カナリヤの会滝本太郎